

平成30年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

イタリアのアグリツーリズモ

調査地：イタリア共和国

調査日：平成30年6月19日～27日

平成30年10月

一般財団法人 地域活性化センター
振興部 地域づくり情報課 小藤 博之

目 次

1. はじめに	P1
2. 農業とアグリツーリズム	P2
(1) イタリアの農業	P2
(2) アグリツーリズム	P3
3. 視察・調査事例	P4
(1) アグリツーリスト協会	P4
(2) カーサ・アンドレア	P6
(3) テヌータ・ラ・フラッタ	P8
(4) アグリツーリズムソシエッタ アグリコーラリボン	P9
4. おわりに	P11

1. はじめに

筆者の派遣元である岡山県真庭市は岡山県北部に位置し、森林面積が約8割を占めていることから、以前から木質バイオマス資源の活用に取り組んできた。一方、人口減少と高齢化は当市も例外ではなく、人口は48,964人（平成22年）から46,472人（平成27年）へ5年で5.1%減少し、高齢化率は33.6%から36.6%に上昇した。更に2020年には39.0%に達すると市では推計している。

市の北部は鳥取県境に連なる蒜山三座と山麓部に広がる壮大なスロープの蒜山高原、三平山（みひらやま）、朝鍋鷲が山（あさなべわしがせん）、毛無山（けなしやま）に至る一帯が大山隠岐国立公園の一部を成しており、西の軽井沢とも呼ばれる風光明媚な観光地の一つである。観光客は主に関西圏を中心として全国から訪れている。岡山県の観光入込客数は17,404千人（平成28年）で、前年に比べ大きく増加している一方、県内の主な観光地域別に見ると真庭市の蒜山高原への観光客数は減り続けている。（表1）

（単位：千人、%）

観 光 地 域 名	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	対前年比
倉敷美観地区	3,151	3,069	3,065	3,534	3,845	108.8
後楽園・岡山城周辺	1,824	1,829	2,021	2,212	2,649	119.8
蒜 山 高 原	2,970	2,850	2,512	2,504	2,327	92.9
玉 野 ・ 渋 川	2,059	2,153	2,130	2,132	2,045	95.9
吉 備 路	1,401	1,433	1,675	1,636	1,498	91.6
津山・鶴山公園	1,190	1,331	1,182	1,228	1,321	107.6
笠岡・笠岡諸島	1,091	1,168	1,226	1,266	1,274	100.6
児島・鷲羽山	1,217	1,268	1,125	1,126	1,195	106.1
美作・湯郷温泉	896	903	920	947	873	92.2
J R 岡山駅周辺	845	979	610	701	715	102.0

▲表1：岡山県内の主な観光地域の観光客数（出典：岡山県産業労働部観光課）

こうした現状の中、筆者が注目したのは農家民宿である。農家民宿とは、農業を営む者が、旅館業法(昭和23年法律138号)に基づき都道府県知事の許可を得て、観光客等の第三者を宿泊させ、自ら生産した農産物や地域の食材を用いた料理を提供し代金を得る事業のことで、農林漁業体験や農山漁村の生活体験を通じて、自然・文化・人々との交流を図る都市農村交流である。都市農村交流は、農山漁村の活性化の手法として、とりわけ農家民宿は農山漁村のありのままの生活や地域の魅力を発信する有効な手法として全国に広がっている。

真庭市には農村型リゾート「なかつい陣屋」という体験型宿泊施設があるが、主に教育旅行に利用されるにとどまっており、観光客の集客が課題である。新たな農家レストラン

の開業や農家民宿で農家の所得向上を目指し、都市と農村の交流から農村地域の経済の活性化につなげていきたいという思いから、2018年6月19日から27日にかけてイタリアの農家民宿を訪れ調査した。

2. 農業とアグリツーリズム

(1) イタリアの農業

イタリアはEUの主要農業国の一つであり、農業生産額はフランスに次ぐEU第2位で、EU全体の13.2%を占めて(2016年)いる。南北に長い国土を有し、平原、山岳、丘陵といった変化に富んだ地形である。アペニン山脈がイタリア半島を縦断する特徴的な地形から、地域により農業構造は大きく異なっている。北部は大陸性気候の影響を受けて比較的降雨量が多いことから、水稻、小麦、酪農が主体であり、南部では地中海性気候の影響を受けて高温少雨のため、デュラム小麦、オリーブ、柑橘類が主体である。主要農産物の耕作面積は2015年で、全耕作面積中デュラム小麦が15.8%(132万9,000ha)、オリーブが13.6%(114万8,000ha)で3割近くを占める。農地は1975年の1,751万haから2002年に1,544万ha、2010年に1,286万ha、さらに2013年では、1,243万haまで減少している。それでもイタリアの全農耕地面積は日本のその2.8倍もあるものの、1戸あたりの平均農地面積は6.1haと日本の2.5倍で欧州の中では規模が小さい。

2010年イタリアの農家総数は163万420軒(2010年イタリア農業国勢調査)だったが、2013年には147万1,185軒(2010年比9.2%減)に減少した。一方で、農業の生産額は2009年の277億9,600万ユーロから2015年には544億3,800万ユーロと95.8%拡大している。イタリアの農業政策は、EUの共通農業政策(CAP:Common Agricultural Policy)を基本に進められてきた。小規模零細農家が多く、コスト低減、農業構造改善を目指した規模拡大、加工・流通施設の整備、集団化・協業化に注力している。中でも、イタリアの農業の特徴として有機農業が挙げられる。1980年代半ばにイタリア有機農業協会(AIAB:Associazione Italiana per l'Agricoltura Biologica)が設立されており、有機農業面積は150万haで世界第6位、農用地に占める有機農業面積の割合は12%で世界第9位(2015年)である。

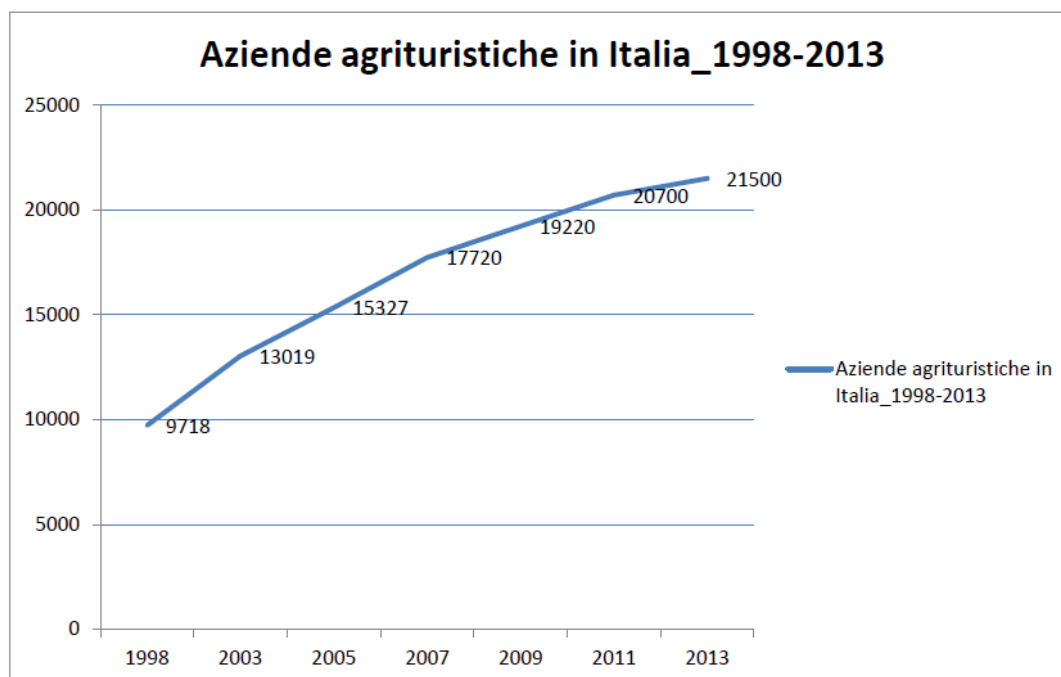
(2) アグリツーリズム

イタリア語でアグリツーリズム(Agriturismo)とは、農業を意味するアグリコルトゥーラ(Agricoltura)と観光という意味のトゥーリズム(Turismo)を結びつけた造語である。

1985年にイタリアで、「アグリツーリズム法」が世界に先駆けて制定された。この法律によれば、アグリツーリズムとは、観光客を受け入れる農家、又は農業法人で、宿泊施設、レストランなどを営業し、あわせて農業体験・文化活動などを提供する。この法律により、農村部にふさわしい観光の促進を通じて、農業を支えていくという姿勢が明確に打ち出された。

イタリアにおけるアグリツーリズムの推移は以下の通りである(図1)。1998年に9,718軒だったが、2013年には2倍以上の21,500軒へ増加している。年間約280万人が利用し、

延べ宿泊人数は 1 千 235 万人、1 人平均 4.5 泊、26%が外国人観光客である。

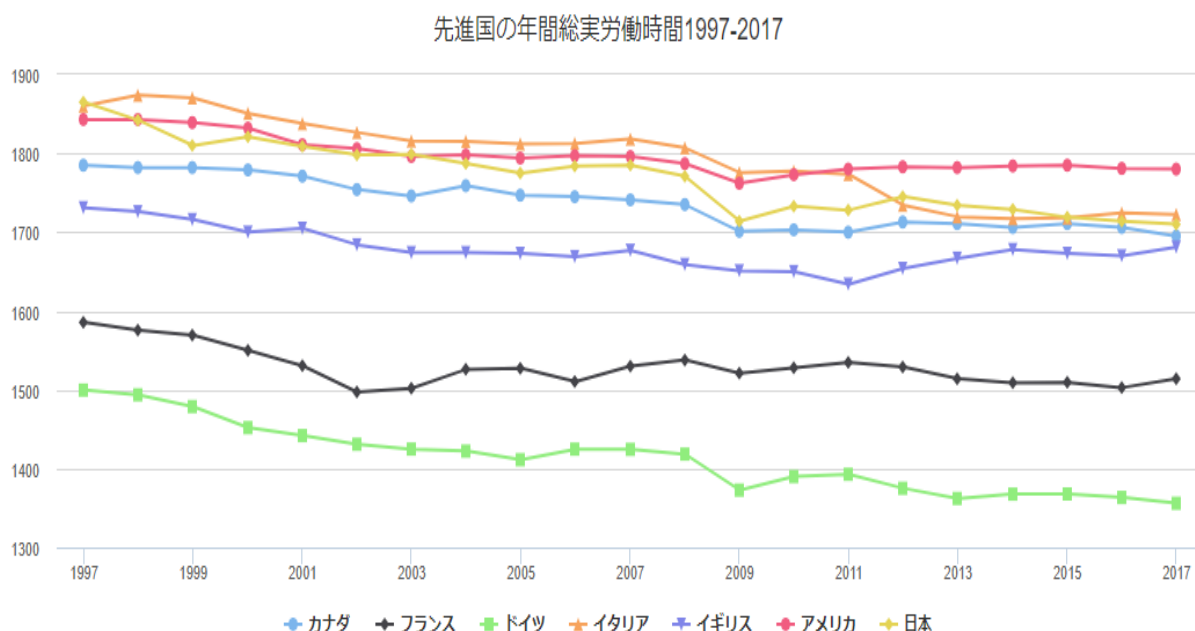


▲図 1：イタリアのアグリツーリズムの推移 1998-2013（出所：Agriturismo）

一方、日本の農家民宿数は 2005 年に 1,492 軒、2010 年 2,006 軒と増加するが、2015 年には 1,750 軒と 5 年前と比べて 12.8%減少している。減少した要因としては、農家民宿には家族経営が多く、総じてビジネスとしての意識が低く、後継者不足や宿泊設備の老朽化などの課題解決ができていないことが考えられる（農林業センサス農林業経営体調査）。また、ヨーロッパのグリーンツーリズムはホリディやバカンスを利用した長期的なものであるのに対し、日本ではそのような長期休暇が取りにくい上、地理的に都市と農村が近接していることで日帰りですぐに農業や漁業体験ができるため、滞在型観光への需要が少ないと考えられる。

ところで、グリーンツーリズムという言葉はフランスに起源があるとされている。国土の 8 割が農地というヨーロッパ最大の農業国であるフランスは 1936 年に世界初のバカンス法を定めた休暇大国でもある。田舎の田園をバカンス先として国が振興するなど農村観光の先進国である。休暇と観光は密接な関係にあるが、ヨーロッパは日本に比べ労働時間が少ない。先進国一人当たりの平均年間総実労働時間を比較してみると下図（図 2）の通りである。1997 年の国別労働時間は、ドイツ 1,499 時間、フランス 1,585 時間、イギリス 1,731 時間、カナダ 1,785 時間、アメリカ 1,843 時間、イタリア 1,860 時間に対し、日本は 1,865 時間である。ところが、日本では 20 年経過した 2017 年には、フランスやドイツには及ばないものの、1,710 時間と他の先進国並みかそれ以下に労働時間が減少してきて

いる。年中働いてばかりで余暇に費やす時間が大幅に増えなければ欧州のようなバカンスは日本には根付かない可能性が高いが、余暇時間が多少でも増えれば、農家民宿をその過ごし方の選択肢の一つとして発展させる余地があるのではないかと考える。



▲図 2：先進国の年間総実労働時間 1997-2017（出所：OECD Database hours work を基に作成）

3. 視察・調査事例

(1) Agritourist (アグリツーリスト協会)

Agritourist(アグリツーリスト協会)はイタリア最古のアグリツーリズム組織である。1965年にシモーネ・ヴェルーティ・ザーティ侯爵が「イタリア農業連盟」の13名の若手職員と共に設立した。当時トスカーナ地方の農村はワインが安く買い叩かれ、農民が生計をたてることができず農村の過疎化が進み、地域経済が衰退していった。そこで、木造民家を民宿にする農家のために、宿泊施設の防火基準や衛生基準が緩和されるとともに、農家民宿の経営支援のためにアグリツーリスト協会が立ち上げられた。現在アグリツーリスト協会は、イタリア国内の19州に支部が存在し、加盟農家数は、約1,000となっている。役職員は常勤2名、非常勤7名の合計9名で運営している。以前は国から補助金を受けていたが、現在国からの補助はなく会費や有料のセミナー等の事業収入で運営している。年会費はベッド数によっても異なるが140€～220€となっている。協会の主な業務は、経営者向けの融資の斡旋やクレジットカード手数料の割引、予約サイトの運営及び外国語講座の実施などの会



▲Agritourist（アグリツーリスト協会）HP

員へのサービスの提供である。



▲(中央 Agritourist Paolo Appio 氏)



▲(Agirtourist にて記念撮影)

また、イタリアには今回視察した Agritourist(アグリツーリスト協会)以外にも、Terranostra(テッラ・ノストラ)やTurismoverde(ツーリズム・ヴェルデ)といったアグリツーリズムのネットワーク支援組織がある。大農場主や自作農、小作人などそれぞれの属性によって組織が分かれながらも、今日までそれぞれ多様性を認め発展してきた。また、これらの組織に属さない事業者も存在するが、個性を尊重し、切磋琢磨しながら今日のアグリツーリズムは拡大してきたという。

2006 年に改正されたアグリツーリズム法は以下の目的を定め、農家及び農業を支援している。

- ① 各地の固有の資源を保護し、その特徴を生かすとともに、活用する。
- ② 農村地域における人的活動の維持を支援する。
- ③ 農業における多機能性及び農業所得の多様化を支援する。
- ④ 経営所得の増大及び生活の質の改善を通して、土壌、土地及び環境の保全に対する農業経営者の取組を支援する。
- ⑤ 農村の建築遺産を修復し、かつ、景観の独自性を保護する。
- ⑥ 地域の特産物、高品質の生産物及びそれらと結びついた郷土料理・ワインの伝統を支援し、助成する。
- ⑦ 農村文化及び食育を促進する。
- ⑧ 農業及び林業の発展を支援する。

農村部における観光は、農業地域の均衡ある発展を通して、農業生産者の存続を促すとともに、自然や建築などの農業遺産のより有効な利用、環境の保全保護の強化、地域の特産物の販売促進、農村社会の伝統や文化の保護・振興、都市と農村の関係の改善をもたらすものとして、大きな役割を期待されていた。1985 年のアグリツーリズム法制定から 20 年が経過した頃、アグリツーリズムに携わる農家の数は 15,000 を超え、利用者は 300 万人規模に達した。しかしながら、アグリツーリズムの発展が一部の州に偏るなどその活用が不十分な農山村もあり、次第に売上高も頭打ちの傾向になっていった。このため、1985 年法に代わる新たなアグリツーリズム法が 2006 年に施行さ

れた。改正の大きな特徴は、簡便化と柔軟性である。まず、開業にあたっての手続きを簡便化した。州政府に登録しなくても、コムーネ(市町村)への届け出だけで済むようになった。また、アグリツーリズムは農業経営主が行うものと定義されており、アグリツーリズム経営農家においては、農業経営に割く時間は、アグリツーリズム経営の時間と比べて、相対的に多くなければならない。即ちアグリツーリズムの仕事の比率が上回ってはいけないのだ。宿泊や飲食の提供において、対象となる客が 10 人以下の場合は、それだけで、農業経営が主たる職業とみなされる。さらに、小規模な経営に配慮し 10 人までの客に対する食事の調理は、家庭の調理場の使用を認めており、ベッド数が 10 台までであれば、宿泊施設としては、住居としての適性のみが要件となる。つまり、一般の飲食業や宿泊業の場合に義務付けられている設備や厳しい要件が免除されているのである。

農業との結びつきが明らかであれば、宿泊や食事の提供を伴わないレクリエーションや文化的活動もアグリツーリズムとして認めることで柔軟性をもたせている。

その反面、農業との結びつきの要件をより厳しいものとすることで、観光業におけるアグリツーリズムの特色を際立たせている。中でも食事の提供に関する規定は厳しくなった。2006 年法では、アグリツーリズムの条件として、その農園が周辺地域の農園で収穫された農産物、または製造された食材、飲料(酒類を含む)を提供し、同時に全国的に知られた品質保証付きの産品・製品を供することが求められる。また、農園で生産された農産物、または調合された酒類などを宿泊客に試食・試飲させることが必要である。しかし、現実には規制の網をすり抜けられたり、法が遵守されなかったりすることもある。協会では、イタリア国内で無認可の B&B(Bed & Breakfast)やアグリツーリズムを発見し、摘発に繋がった事例もあったという。アグリツーリスト協会の会長である Cosimo Melacca 氏がリグーリア州の首長や政府関係者とのディスカッションを重ねたことも改正の要因の一つになったそうだ。また、イタリアの若い世代が農業への参入を希望した際、農業だけでは生活していけないので、生計を立てる手段として、アグリツーリズムを選択するケースも多いとのことである。

(2) カーサ・アンドレア (Casa Andrea)

筆者らはウンブリア州オルヴィエートの郊外にあるアグリツーリズムの宿に宿泊した。オルヴィエートはローマから北西へ約 100km に位置し、人口は約 2 万人で、14 世紀につくられたゴシック建築の大聖堂が有名である。オルヴィエートは「緑のハート」と呼ばれるウンブリア州の中でも美しい町のひとつである。

宿泊先のカーサ・アンドレア (Casa Andrea) とは、イタリア語で「アンドレアさんのお家」という意味である。オーナーのアンドレアさんは祖父が残してくれた家を使って農家民宿の経営を 4 年前 (2014 年) から始めた。彼はこれまで都会のレストランやホテルで働いていたが、勤めていたホテルを辞めて農業を受け継ぎ、妻と農家民宿を始めた。理由はそれまでの都会の生活に疲れストレスが溜まっていたことと、祖父が大切にしていた家を守りたいという思いから開業しようと思ったそうだ。自分で時間を調整して仕事ができる農家民宿は忙しいながらも魅力的なようだ。

広大で綺麗な宿泊施設はプールも完備しているが、宿泊者のために壁を取り払い、暖炉を大きくしたり、トイレを各部屋に設置するなどリフォームしたという。改築費用だけでも 15 万€（約 2,000 万円）程度かかったが、農家民宿を始めるための改築費用に対する補助金制度があり、工事完了後から 10 年間をかけて対象経費の 55%を受け取ることができるそうだ。

部屋数は 4 部屋あり最大 8 名の宿泊が可能である。1 階は共同スペースとしてテーブルとソファがあり、朝食は円いテーブルで緑豊かな景色を堪能しながら摂ることができる。2 階は宿泊部屋になっており、4 室の個室はシャワーとトイレを備えている。



(Casa Andrea 全景)



(オーナーの Andrea Purgatori 氏)

この日は、他の宿泊者はなく、筆者らの貸切となった。この施設に滞在する主な旅行客は、イタリア国内はもとより、ドイツ、ポーランド、イギリス等から訪れ、1 週間から 2 週間程度滞在する人が多いという。

客層は、カップルや家族連れが多いそうだ。滞在客は、ここを拠点としながら、オルヴィエートを観光したり、野菜を収穫したり、乗馬を楽しんだり、プールで日光浴を楽しんだり、思い思いに過ごす。ここには多くのアクティビティはないが、素晴らしい時間を過ごすことができると彼は熱く語ってくれた。宿泊予約が定員を上回れば、近くの宿泊施設を紹介するそうだ。また、同じ農家同士の共助も行われている。牧草をあげたり、農業用機械を貸借りしたり、羊とヤギのチーズを交換し合う等、互いに助け合っている。彼が飼育しているのは、豚、アヒル、鳥、羊、ウサギである。今後は牛も飼育してみたいと意気込む。夕食には、自家製のチキンサラダ、ラザーニャ、子羊の腰肉ロースト、リコッタチーズのムース等食べきれない程の美味しい料理と地元オルヴィエートのワインが提供された。美味しいイタリア料理も農家民宿の醍醐味である。実際に宿泊してみると、彼らのおもてなしと緑豊かな環境で非日常を体験し、居心地の良い時間を過ごせた。



(飼育している豚)



(客室)



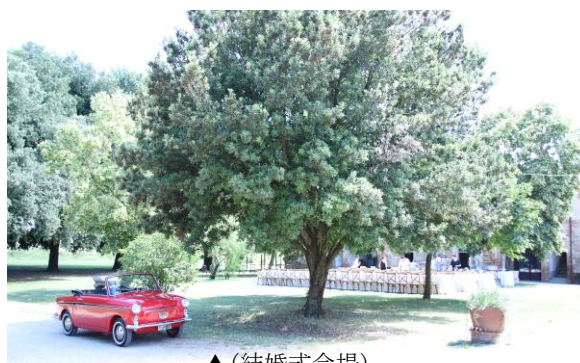
(夕食)



(朝食)

(3) テヌータ・ラ・フラッタ (TENUTA LA FRATTA)

トスカーナ州はイタリアの中でも特にアグリツーリズモが多い州である。筆者らは、トスカーナ州シエナ県シナルungaにある1208年に建設されたテヌータ・ラ・フラッタ(Tenuta la fratta)を訪れた。かつて大規模な農場経営者が小作人を200人程度雇用しながら小麦を栽培していた施設で、経営主、小作人とその家族らが暮らしていた建物を利用したアグリツーリズモが行われている。400haある広大な敷地には、農地と小作人達の居住する棟と学校、教会が存在しており今も修復や改装を行いながらアグリツーリズモに活用している。訪れたこの日は結婚式が行われるとあって、庭園ではお祝いの準備の最中だった。親族や友人らがお祝いに続々と駆けつけ、ここに数日間滞在するという。最近の都市



▲(結婚式会場)

型ホテルのように洗練されてはいないが、都会の喧騒から離れた古くからの建物を利用した結婚式は人気を集めているようだ。

この施設があるシナルンガはキアナ牛が有名な地域である。トスカーナ州東部からウンブリア州方面に広がるキアーナ溪谷から由来したキアナ牛はイタリア在来種であり、世界中の牛の祖先とも言われ、古代エトルリア時代にも飼育されていた。かつて小作人たちはキアナ牛とともに農地を耕作し、生活になくてはならない存在だった。真っ白で標準的な牛よりも大きな体格のキアナ牛は耕作にも適していた。また食用としても大変貴重なものである。肉質は柔らかくタンパク質が豊富で、コレステロール値が低い。宿泊施設に併設されているレストランでは、名物のキアナ牛を使った食事を楽しむことができる。イタリアは世界遺産が多い国であることから、普段から歴史的価値のある建物や美術品に幾度となく触れる機会が多い。故に歴史的な建物を利用したアグリツーリズモが近代的なホテルにはない魅力として、人々に受け入れられているのであろう。



▲（宿泊施設）



▲（キアナ牛）

（４）アグリツーリズモソシエッタ アグリコーラリボン（Agirtourismo Societa' Agricola Livon）

ウンブリア州アッシジ郊外のモンテファルコにあるワインも醸造しているブドウ農家が営むアグリツーリズモを訪問した。ブドウ畑の間には糸杉が植栽され美しい風景が広がっている。作付け面積約 20ha のコルサント（Colsant）農場は、標高約 500m の丘陵地帯でワインがつくられている。ブドウ畑の日差しは強いが、影に入れば風の流れもよく心地よい。栽培しているブドウはサンジョベーゼという品種でフルーティーな香りが自慢のブドウである。年間 300 トンのブドウを収穫し、ワインやジュースに加工される。ブドウ畑に隣接したワイン工場とアグリツーリズモの施設は一体的に整備されており、収穫後すぐにワイン造りが可能な環境が整っている。ブドウは秋から冬に 4 日間程かけて機械で収穫するという。機械がない頃は 25 人で 1 ヶ月ほどかけて収穫していたという。前述の通りアグリツーリズモ法では、食事及び飲料を提供する農場は、その土地の農業生産物やワイン、郷土料理の提供が義務付けられている。食事については、イタリアの食品品質保証制度における品質保証の表示 DOP（保護指定原産地表示）、IGP（保護指定地域表示）、ワインについては、IGT（典型的産地表示）、DOC（統制原産地呼称：上級な食品やワインに許される）及び

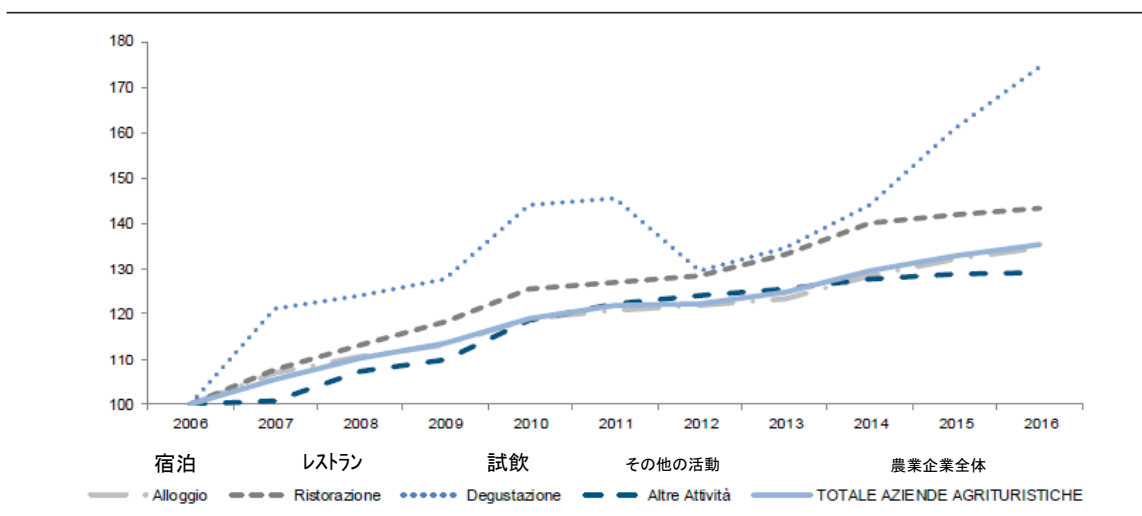
DOCG（統制保証原産地呼称：制約が厳しく、出荷に際して国の検査を必要とするワイン）といった地域特産の生産物又は伝統的農産物加工品を優先することになっている。DOCGのサグランティーノ・ディ・モンテファルコはコルサント（Colsant）農場を代表するワインの一つである。

ブドウ畑と工場に隣接した宿泊施設には、海外からの旅行者が宿泊していた。主な宿泊者はこの農場で生産されるワインのインポーターである。現在宿泊施設の改修をしている最中だったが、宿泊者がブドウの収穫やワインのテイスティングを経験できる体験型の農業観光は世界でも有数のワイン生産量を誇るイタリアらしい姿であろう。

ワインのテイスティングが可能なアグリツーリズモの人気は統計からも読み取れる。イタリア国内でのアグリツーリズモが増加してきたのは前述の通りだが、事業種類別に見ると次（図3）の通りである。2006年を100とした10年間の事業者数の推移であるが、テイスティングが可能な施設は、2006年から10年間で75%増加している。これは、イタリアのワインのみならずオリーブオイルの試飲も体験できる施設数も含まれており、地域産業の特徴を活かした施設が大きく増加している。

活動種類別の農業企業(a)。2006年から2016年(基準年2006 = 100)

AZIENDE AGRITURISTICHE PER TIPOLOGIA DI ATTIVITÀ (a). Anni 2006-2016 (anno base 2006 = 100)



(a) Un'azienda agricola può essere autorizzata all'esercizio di una o più tipologie di attività agrituristiche

▲図3：アグリツーリズモの種類別の推移（出所：ISTAT イタリア政府統計局）



▲ (Colsant 農場入口)



▲ (ブドウ畑：サンジョベーゼ種)

5. おわりに

今回訪れたイタリアのアグリツーリズモは、3つのネットワーク支援組織があり、旅行者はイタリア国内のみならず、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカなど広く海外から訪れ、長期休暇を利用した観光や農家民宿をしていることが分かった。また、農家民宿の経営者はいずれも地元を愛する気持ちが強く、どの施設も旅行者へのホスピタリティーが旺盛で温かく迎え入れてくれた。日本とイタリアは、気候が違う。稲作中心の農業と大規模な農場、放牧とでは確かに異なる。しかし、それぞれの土地にある資源を活かしながら農家民宿の誘客につなげていこうとする点ではイタリアも日本も共通していると考えられる。農家民宿は彼らにとって余計な仕事ではなく、むしろ今取り組んでいる農業を自分自身が楽しみ、採れた食材を使ってふるまう料理に旅行者が喜ぶことで生きがいを感じ暮らしているのだろう。今回の調査を通して、アグリツーリズモを経営するイタリア人は概して情熱的であり、一般的なことよりも特徴的なことを好み、楽観的な気質にあるように感じられた。経営者は誇りと責任と情熱を持ってそれぞれの経営に携わっていることが理解できた。祖先が残してくれた土地や建物を守り農業を生業とする一方で農家民宿を通して魅力を発信している。

日本でもこういった考え方は共感を呼ぶのではないだろうか。先祖が残してくれた土地や建物を守りながら、そこで収穫される野菜や食事を提供し、寺社や温泉などの地域資源にも触れながら農家民宿で過ごすのである。一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構発行の「数字でわかるグリーン・ツーリズム 2010」によると、グリーンツーリズムに関する消費者ニーズとして農山漁村への来訪の主な理由として、「のんびりできそう」「おいしい食材で有名な場所」の人气が高い。次に農山漁村に対し興味・魅力を感じる対象は「新鮮な食材」「自然とともに生きる人・その生き方、価値観」「都会とは違う時間の流れ・雰囲気

気」である。そして農山漁村に旅行に行く場合にしたい過ごし方と体験では、「おいしい食を楽しむ」「美しい農山村風景を訪ねる」「里山をのんびり歩く」であり、体験では「温泉巡り・湯治」「名所・旧跡・景勝地などの観光地めぐり」「直売所・道の駅・現地の市場などでの特産品、地場産品の販売」となっている。農山漁村の魅力は「食」「自然」「雰囲気」と「体験」である。

派遣元の真庭市では、農家民宿は教育旅行での利用にとどまっており、新たな誘客のための手段を講じる必要がある。地域の食材を活かした新たなメニュー開発や自然を満喫するサイクリング、アマゴのつかみ取りやジャージー牛の搾乳体験などは日常を忘れることができる体験として提案したい。今回調査したアグリツーリスト協会の世界中から検索が可能なサイトと同様に、岡山県内の農家民宿も横断的に検索が可能で、情報発信できる多言語化したポータルサイトは集客に有効であろう。蒜山ワインや地酒と地元の食材を用いた料理、ブドウの収穫やアクティビティが充実した農家民宿が提供できれば誘客の可能性は更に広がるのではないだろうか。また、宿泊客が増えれば、農家民宿による所得の向上や若者の新規就農と旅館業への参入が期待でき、農業離れの脱却にも貢献できる可能性がある。

日本では働き方改革や長時間労働の是正に官民あがて取り組んでいる。余暇の使い方や働き方の価値観も大きく変革している現在、「本物の豊かさ」を地方で提供できるかどうか益々問われていくだろう。

(謝辞)

今回の海外研修にあたり、調査にご協力いただいたアグリツーリスト協会の Paolo Appio 氏をはじめ、現地でサポートいただきました林延行氏ほか多くの皆様のご協力と今回貴重な学びの場を提供していただきました(一財)地域活性化センターと派遣元の真庭市に対してこの場を借りて御礼申し上げます。

【参考文献・資料】

宗田好史『なぜイタリアの村は美しく元気なのか～市民のスロー志向に応えた農村の選択～』(学芸出版社 2012)

松永安光・徳田光弘『地域づくりの新潮流 スローシティ/アグリツーリズム/ネットワーク』(彰国社 2007)

馬場正尊・中江研・加藤優一 編著 著者 菊池マリエ『CREATIVE LOCAL エリアリノベーション海外編』(学芸出版社 2017)

大森 彌・小田切徳美・藤山 浩 編著『世界の田園回帰8』(農文協 2017)

陣内秀信『イタリアの街角から スローシティを歩く』(弦書房 2010)

篠 利幸『田園のイタリアへ! アグリトウリズムの旅』(N T T出版 2003)

ARC 国別情勢研究会『ARC レポート-経済・貿易・産業報告書-』(2018)
一般財団法人都市農村漁村交流活性化機構『数字でわかるグリーン・ツーリズム 2010』
イタリアのアグリツーリズム法 <http://www.ndl.go.jp/diet/publication/lgeis/237/-23704.pdf>
アグリツーリスト協会 <http://www.agriturist.it/>
イタリア政府統計局 <https://www.istat.it/it/archivio/agriturismo>
農林水産省 http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/pdf/kaigai_3.pdf